

つぎの  
答えは  
山陰に。  
**NEW  
NORMAL  
NEW  
LOCAL  
SAN'IN**





第69回全日本広告連盟山陰大会記念特集

# SAN'IN

未来のスタンダードは  
山陰にある。



南大山の麓で、古来の自然信仰と現代の自然保護活動によって守られてきた大山には、豊かな自然が息を吹き返している。

# NEW NORMAL NEW LOCAL SAN'IN

つぎの答えは山陰に。

今、わたしたちの生活は急激に変わりつつある。都市部で人口過密が叫ばれる一方で、日本全体を見れば少子高齢化と人口減少はすでに前からの大きな課題だ。そうした不均等を抱える社会を覆ったコロナ禍は、東京一極集中の拠点をあぶり出し、地方志向の強い風になっている。時代の変化は、現代社会が内包する問題を浮き彫りにする。経済、教育、医療文化、自然環境……さまざまな面で持続可能な社会のありかたが問われる中、課題先進地としての山陰の可能性に注目が集まっている。

山陰は人が少ないと言われてきた。でも、拠点を築けばそれは、これまでの都会が、日本が、過密へと走り過ぎただのと言えないだろうか。ずっと前から少子高齢化と人口減少に向き合ってきた山陰は、日本の未来の姿だ。この地には未来を見据え一歩ずつ前に進もうとしている人と、営みがある。

わたしたちは、今までの当たり前が通じない時代を生きている。新しい生活様式、ニューノーマル。な世界で、山陰はローカルの先陣を走る。ニューローカルだ。これからの社会が歩むべきものが、山陰にある。

## INDEX

- P.4 ..... 大山グリーンと高津ブルー
- P.5 ..... ジョイちゃん/アキちゃんがローカルヒーロー
- P.6 ..... 15歳の自分へ。東京からの手紙
- P.7 ..... 東京のスタンダードをつくる山陰の女性たち
- P.8-9 ..... 農家と自然
- P.10 ..... 泉のライバル17 鳥取VS鳥取
- P.11 ..... 山陰ローカルディスタンス
- P.12 ..... 遅れてない！面白い自分をつくってみて
- P.13 ..... コロナに打ち勝て！山陰観光復興
- P.14-15 ..... 草葺家・藤汁屋が見る山陰の典と可能性

### おから屋に

**松本 忠**  
株式会社 石見山陰山陰観光公社 代表取締役  
1994年岩手県生まれ。鳥取県大田原市。2012年、石見山陰のまちづくりへ参加し、前市長ブランドの策定、マーケティングを担い、現在は大田原に特化した企画・営業・マーケティングを担当し、地域の活性化を担っている。

**阿部 寛昭**  
株式会社おから屋 代表取締役  
1977年岩手県生まれ。鳥取県大田原市。鳥取県産品振興会に所属し、「山陰に新しい味を届ける」をミッションに、産地を支援するプロジェクトを推進し、地域活性化に貢献している。

**小倉 純太郎(右) / 金子(左) / 藤村(中央)**  
株式会社 代官社 / フードクリエイター / 写真家  
1989年鳥取県生まれ(純太郎)、1983年鳥取県生まれ(金子)。鳥取県産品振興会に2016年「産地創生」設立。支那産品のプロデュースなど産地振興とつながりながら、写真・映像制作を通じて産地の魅力を発信している。

**菊山 純子**  
KIRIN Design 代表  
1994年岩手県生まれ。2017年より山陰県鳥取市へ移住し、デザイナーとして、鳥取市のデザインプロダクト・クリエイティブ教育などの面でパワフルな働き方を展開。SDGをキーワードに地域の魅力を発信している。

**大野 佳祐**  
鳥取県立鳥取大学経済学部 専攻 地域経済学  
1979年岩手県生まれ。早稲田大学経済学として鳥取県、2014年に鳥取県立大学の専攻を創設。鳥取県産品振興会がプロデュースした「おから」の魅力を発信し、鳥取県産品の魅力を発信し、地域の活性化に貢献している。

**西村 早菜子**  
株式会社 WOODS 代表取締役  
1972年岩手県生まれ。2004年に鳥取県鳥取市の職人に習い込み、2009年鳥取県産品振興会に加入して「おから」の魅力を発信し、鳥取県産品の魅力を発信し、地域の活性化に貢献している。

大山グリーンと高津ブルー  
暮らしと共にある美しい水

山陰に、日本に誇る名水地があることを知っているだろうか？

中国地方最高峰・大山から湧き出る豊かな水は、古くは茶室の水「利生水」として各地から参拝者を集め、今ではミネラルウォーターとして広く知られている。その秘密は、裾野へ広がる雄大なブナの森。天然のダムと呼ばれるブナの森は地下に大量の水を溜めこみ、土壌で濾過された地下水が水源になる。

原生状態に近い森林が残る大山を歩けば、自然界の森の鮮やかさに驚かされるだろう。大山は山岳信仰の聖地として、1889年まで一般入山が禁じられ、木一本すら許可なく切ることは許されなかった。国立公園となった現在もその自然環境は保護され、美しい水を裾野へ運んでいる。

鳥根県西津を流れる高津川は、国土交通省の調査で7回も水質日本一に選ばれた清流だ。とはいえ、高津川は人里離れた秘境の川ではない。水源から河口まで人の暮らしのそばにある、日本一美しい近所の川だ。

高津川の保護利用に関わる齋藤義徳さんは「人里がある中流域の水質が、水源地よりきれいな川は珍しい」と言う。それは、この地域に川や自然の恵みを大切にすることを誇りとしている証拠でもある。美しい深い青をたたえる高津川は天然の鮎を育て、歴先に豊かな生活水を選び、夏には子どもたちのプールになる。

大山と高津川、山陰が誇る名水は手付かずの自然の副産物ではない。自然への信仰と親しみが息づく暮らしの中で、人の手で守られてきた美しさだ。ユネスコの発表によれば、2050年には世界人口の半分が水不足に直面する可能性があるという。水資源の回復に直面する現代社会の中で、この地の暮らしと共にある美しい水は、特別な意味をもっている。

# 守り継ぐ一滴。



島根県 高津川

国土交通省の調査で7度の「水質日本一」に認定。樹齢1000年を超えると言われる杉のふもと「大蛇ヶ池」が水源。源流の古賀町六日市から河口の益田市を経て日本海に注ぐ。本流にダムがない日本で唯一の清流で、天然の鮎や川づい、河口でとれるハマグリは名産。



鳥取県 大山

標高1,729mの中国地方最高峰大山。山岳信仰の聖地として人の立ち入り制限されてきた歴史を持ち、現在も自然保護運動のボランティアが働いている。西日本最大級のブナ林を擁する大山の湧き水は古くから名水として知られ、そばや豆腐など水を生かした食文化も育んだ。

撮影地：高津川源流の大蛇ヶ池



# ジイちゃんバアちゃんが ローカルヒーロー。

ずっと前から高齢化に向き合ってきた山陰の田舎町で、  
高齢者自ら地域の未来をつくる、循環の仕組みが生まれている。

- ここ引ったほうかええよね、のりで。
- 接着剤でね。コけたげましょうか？
- そうそう、のりじゃなくてね。ふふふ。もう笑ってばかり。お仕事も一生懸命だけど、会話も一生懸命。話に夢中のときはそこだけ糸がゆるくなるけえね。あとで見たら話が弾んだところがパッと分かる。
- 縫い方が悪いときはゼーンぶ戻ってやりなおし。お金を払って買ってもらいますからね。「ここがおかしいわ」「いや、そんなことない」なんて、ぐちぐち言いながらやっています、アハハ。
- みんなで美味しいところ探して行くのも楽しみよね。どんな遠いところでも行くけえね。あれぐらい仕事も頑張った日ええのにゆうて。今年は森に行こう、次は山に行きたいねって相談してねえ。
- そんなあLINEのグループせんといけんねって、まちゃんがスマホを買ったの。そんならわたしもゆうて、今は全員スマホ。
- 来年で10年だがなあ。年末の時代くらいにしかならんのに、それでもみんなやる言うんだから。
- 行く場所があるのは、年寄りが一番大事。週に1回ここに来るのが楽しみでねえ。地域づくりなんて、そんな大層なものじゃないんですよ。わたしが楽しんで勝手にやってるの。それがテレビで放送してもらったり、有名人の方が見に来てくださったりね。
- わたしほんと、山くじらをほこりに思ってます。年齢からいって顔が違うわ、わたしたち。輝いとるけえ。
- あんた、わたしが一番ゆうような顔しとるわ、ハハハ。
- みんな輝いとるけえ、それが伝わるんよね。ひとりひとりが主役。じゃけえこの財布買った人は幸せになる！ まあ嘘だけど。アハハハハ。



高齢者2人の取り組みで、全体的な品質を高める  
鳥取県人権「育空クラブ」のみなさん。メン  
バーは会長の武田節子さん(右)を中心に、70  
~80代の3人。毎週水曜日に集まって、地域でと  
れたイノシシの皮で革製品を制作している。



## “畜産”を“資源”に変えた、田舎町の循環経済

おち山くじら / 鳥取県美郷町

このはじまりは1999年、高齢化の進む美郷町の人々は、作物を食わずにイノシシに廃棄されていた。そこで住民たちは厚肉豚を育成、狩猟免許を取り自らワナを仕掛けはじめたのだ。今では約4400人の住民のうち100人ほどが狩猟免許を持つまでに。さらには休止していた食肉処理施設で豚肉処理にとれる「夏イノシシ」を美味しく出荷する技術を開発。豚も知る有名ホテルにも出すほどに。おちちゃんたちも負けてない。郷人会を中心にイノ

シシ皮の革製品を開発。古くは製菓業で栄えた町に手仕事の職人文化を復活させた。「山くじら」とは、豚肉が腐れた江戸時代に使われていたイノシシ肉の置留。歴史的な食肉文化は、現代の山間の町で、食を越えた循環を生むサーキュラーエコノミーとして生まれ変わった。「畜産」を“資源”へ転換した辺境の革命は、今も進行中。美郷町の集会所からは今日も、革を縫うおちちゃんたちの笑い声が響く。



## コミュニティー・カーシェアリングの輪が生む“地域の元気”

永江ささえ愛カーシェアクラブ / 鳥取県米子市

車が運転できないと、生活が立ちゆかない。公共交通機関の少ない地域には、運転免許の返納で生活に困る高齢者は多い。そんな問題を住民自らの助け合いで解決すべく「コミュニティー・カーシェアリング(以下CCS)」に取り組むのが、鳥取県米子市で2番目に高齢化率の高い永江地区だ。「CCS」とは地域のサークル内で車を共有し、生活に必要な移動手段を借り取り組み。ボランティアに名乗りをあげた人がドライバーとして参加し、困っている人の手助けをする。サポートするのは、買い物に運転から乗降の付き添いなど、様々な

日々の困りごと。ドライバーには、まだまだ元気な高齢者も多い。談話の中で地域の賑わいが増え、移動時におしゃべりしたり悩みを相談しあったり。「ありがとうが元気ののもと。車りにされるとうれしくて生きがいになるけんね」と、ドライバーも元気をもらっている。おたがいさまの支えあいと、おかげさまで感謝のこころで、自分たちの地域を自分たちで元気にしていく。「CCS」は移動手段の絆をはるかに結んで、地域の新しい生きがいと、人のコミュニティを生み出した。



### 縁結びの町て人を繋ぎ ワクワクする大人を増やす

出展を軸に、カフェ経営や婚活セミナー開催など、様々な人の出会いの場を創出する板根さん。短編のきっかけは大塚時代の苦い婚活体験。

「25歳で婚活を始めたのですが、10年で約400万円使っても全く結婚できず、ストレスで心身がボロボロでした。当時は60年に一度の出展大社大賞賞の年で、周りの婚活女子たちが縁結びを思い出展へ旅行すると「出展大社にはお茶する場所がない」と言うんです。人生どん底だった私は、直感を信じて大阪から地元出展にUターン。1軒目のカフェを始めました」

物件探しで出会った男性と交際2週間で結婚。結婚と同時に結婚まで叶え、今や3人の子のお母さん。カフェのお客さんの喜びに答える形で始めたコンパのセッティングサービスは、縁結びのコンサルティング業に発展。これまでの知見をモットー化した「縁結び塾」もスタートと大塚賞だ。地域や異性を惹いた出会いが少ないと悩む人が多い中、板根さんの活動はさらに広がる。

「不登校の子どもたちに県内外の面白い大人を紹介したり、大人が学び繋がるワークスペースを運営したり、新たな取り組みも広がっています。子どもはもちろん、ワクワクする大人を地域に増やしていきたいです」

**鳥根 泉 出雲市**  
縁結びコンサルタント、婚活塾  
板根 めぐみさん

出会い

Profile/お名前:めぐみ 1977年生まれ。鳥根県出雲市出身。大塚で飲食店経営に励み、2012年にUターン。株式会社まるこ、株式会社まるこ経営者、婚活塾の発起人兼講師、新居町の取締役を務める。「大塚賞」受賞。婚活塾「縁結び塾」の運営や、縁結びコンサルタントなどの活動で、出展の魅力を上げる。

### 老舗の温泉地から発信する 小さいことの魅力

江戸時代から約250年続く老舗旅館「よしだや」に生4木さんが客女としてUターンしたのは、2017年。よしだやのある有賀温泉は621年に発見されたと伝わる歴史ある温泉地。かつては20軒近い温泉旅館が立ち並び賑わいを醸成していたものの、生4木さんが戻った4年前には旅館の多くが閉業し、かつての賑わいは息を潜めていた。

「昔車の転倒で浜田へ戻った際、僕の温泉、僕々の高齢化、旅館の経営状況を身近に感じたことがきっかけで、私にも何かできないだろうかというUターンを決意しました」

生4木さんの活動は温泉客、懐かしい温泉旅館の仕事も、持ち前の笑顔と町を愛する気持ちで温泉客を誘った。SNSでの有賀温泉の魅力を発信にも取り組んでいる。

「山陰には素晴らしい温泉があります。豊かな自然と美しい人も高橋の魅力。有賀温泉は小さな温泉地ですが、コンパをきっかけに皆が一つのお客のようになればと思っています。温泉、食事、街歩きをそこで楽しんでいるかのように体験いただきたいです。そんな、戻れた方がいちゃもんばあちゃん家に行くように感じているだけなら、みんなが助け合う関係になればいいと思います」

**鳥根 泉 江津市**  
老舗旅館「よしだや」客女  
佐々木 文さん

観光

Profile/お名前:文 1986年生まれ。鳥根県江津市出身。老舗旅館「よしだや」の客女として、Uターンで鳥根温泉に貢献。2017年によしだやで客女として接客。よしだやで客女を務めるため、地域の魅力を発信している。

### 智頭町から日本へ 子育てではなく、子育ての概念を

豊かな自然環境の誇る鳥取県智頭町で、森林を舞台に見立てた「森のようちえん」を運営する西村さん。「安全で豊かな都市で大事に育てられた子どもたちは、シビリアン化した環境を生きていけるのか?」そんな声としての危機感から、土にまみれたたくましい子育ての場として、森のようちえんを立ち上げた。

2期目の森のようちえん、卒業後の自由な学びの場としてのフリースクール、育児のため移住する人に向けたシェアハウスと活動は広がっている。

「智頭町の豊かな自然の中で、出展から教育まで一貫した環境を実現させるのが目標。今は助産院の設立のために頑張っています」

西村さんのバフフルな活動に驚かされるように、智頭町に移住する家族が増え、新しいコミュニティーが生まれている。

「生命は辺境から生まれる」とはレーニンの言葉ですが、昔から豊かだった都市部から移住するものが豊かになる山陰のような場所から、革命的な化学変化は生まれると思います。親が子育てで「子育て」ではなく、子の育つ力を信じて「子育て」の概念を、智頭町をモデルに各地へ広げていきたいです」

**鳥取県 智頭町**  
子育て支援施設「森のようちえん」運営  
西村 早栄子さん

教育

Profile/お名前:早栄子 1972年生まれ。鳥取県出身。2002年鳥取に転居。2006年智頭町へ移住。2009年「智頭町のようちえんまるたんぼ」を設立。現在、助産院として2期目の森のようちえん「まるたんぼ」。「すずぽっくり」フリースクール「智頭町ベリスクール」、子育て支援向けシェアハウス「はじまりの家」を運営。

ローカルから  
未来のスタンダードをつくる  
山陰の女性たち

人も大企業も少ない田舎では仕事もなくて活躍できる現場も限られている……。

そんな固定観念を鷲呑みにして、いいんだらうか? 見方を変えれば、そこにこそ可能性があるのでしょ。

教育、医療、暮らし、仕事、食と暮らしの持続性……ずっと前から、現代の社会が直面する課題と向き合ってきた山陰。

それぞれの視点を生かし山陰のイメージを塗り替える女性たちが、ローカルを拠点に未来の社会をつくりだそうとしている。

Illustration by RANOOHATA

### 小さなまちから生まれた 新しい形の福祉とまちづくり

2019年に設立された「SOI STANCE」は、町に置かれた障害福祉サービス事業所が、白を基調にしたモダンなカフェを併設した町民の空間に、さまざまな個性を持つ人が集まっている。

「作業療法士として働いていた時に、若くして障がいを持った方たちの社会参加が十分だと感じました。リハビリをしながら働く仕事に出会える……そんな場があればと集ってSOI STANCEを始めました。「自分も楽しむ」「福祉が楽しめるリハビリ施設プロジェクト」というのがコンセプトです」

山陰は人が少なく、「育ちにくい」と言われることもありますが、それが地域の魅力や可能性につながると、桐山さんは言う。

「人口に対して医療や介護施設が充実している山陰は、子育て世代や障がいを感じる方が住みやすい地域だと感じます。それに、人が少ないから、交流の場や人が集まっていると感じます。空き家や空き店舗、介護者の不在地域といった問題はこれから出てくるでしょう。でも、小さな町だからこそできるまちづくりがあるはず。これからは、さまざまなライフステージの方が集って暮らせる場所を作り、仲間とともにワクワクできるまちづくりに関わってほしいですね」

**鳥取県 米子市**  
SOI STANCE 代表  
鎌田 亜希さん

福祉

Profile/お名前:亜希 1994年生まれ。鳥取県米子市出身。作業療法士として働いていた時に、障がいを持った方たちの社会参加が十分だと感じました。2019年に「SOI STANCE」を設立。仲間とともに、さまざまなライフステージの方が集って暮らせる場所を作り、仲間とともにワクワクできるまちづくりに関わってほしいですね。

### SDGsをキーワードに 地域の可能性を広げていく

2017年に地域おこし協力隊として松江に赴任した桐山さん。任期中は後地プロモーションやSDGsの普及活動、キャリアに関する講演など、さまざまな仕事をしながら地域のために奔走。その拠点として松江に向き合い続ける理由はなんだろう。

「松江には地域としてたくさんの方の力があります。まず、自分に合った暮らしや仕事づくりができること。自然、歴史、温泉、食文化など多様な魅力が身近にあり、自分に合った環境とバランスがとれます。また、松江は仲間が見つかる町。一歩踏み出すと人とつながり、可能性が広がる風土があります。そして、自分の暮らしや仕事で地域の未来に貢献する感覚が持てることも、大きな魅力だと感じています」

これらの地域の魅力を徹底で支えているのは人だと桐山さんは言う。

「鳥根にUターンをした岩崎君がいて、こうして自分らしく暮らしているのは、多くの人に勇気をいただいたおかげです。今後も関係性を生かし、SDGsを共通言語に、人や地域の可能性を広げるきっかけづくりをしていきたいです」

**鳥取県 松江市**  
地域おこし協力隊  
桐山 尚子さん

パラレルキャリア

Profile/お名前:尚子 1984年生まれ。埼玉県山崎町出身。マーケティング専攻の大学卒業後、松江に赴任。2017年に鳥取県松江市へ赴任。地域おこし協力隊としてUターン。3年間の任期中、ライフデザイナーとして自ら新しい暮らしのきっかけづくり「SDGs」実現の拠点となるまちづくりをテーマに、松江で活動している。

### 町をテーマパークと捉え アトラクションを仕掛ける

地域の発展の鍵を握る観光やまちづくりなど、松江の魅力を伝えるまちづくりの会社を運営する河野さんは、会社のスタッフを「エンターテイナー」と呼ぶ。

「人を楽しませることが仕事だからです。松江を一つのテーマパークと捉え、魅力的なアトラクションや、思わず買いたくなるお土産物をつくりたい。松江はテーマパークのシンボルです。住む人達が誇りを覚悟して、大勢の人が町のファンになってレポートしてくれれば、そんなまちづくりを目指しています」

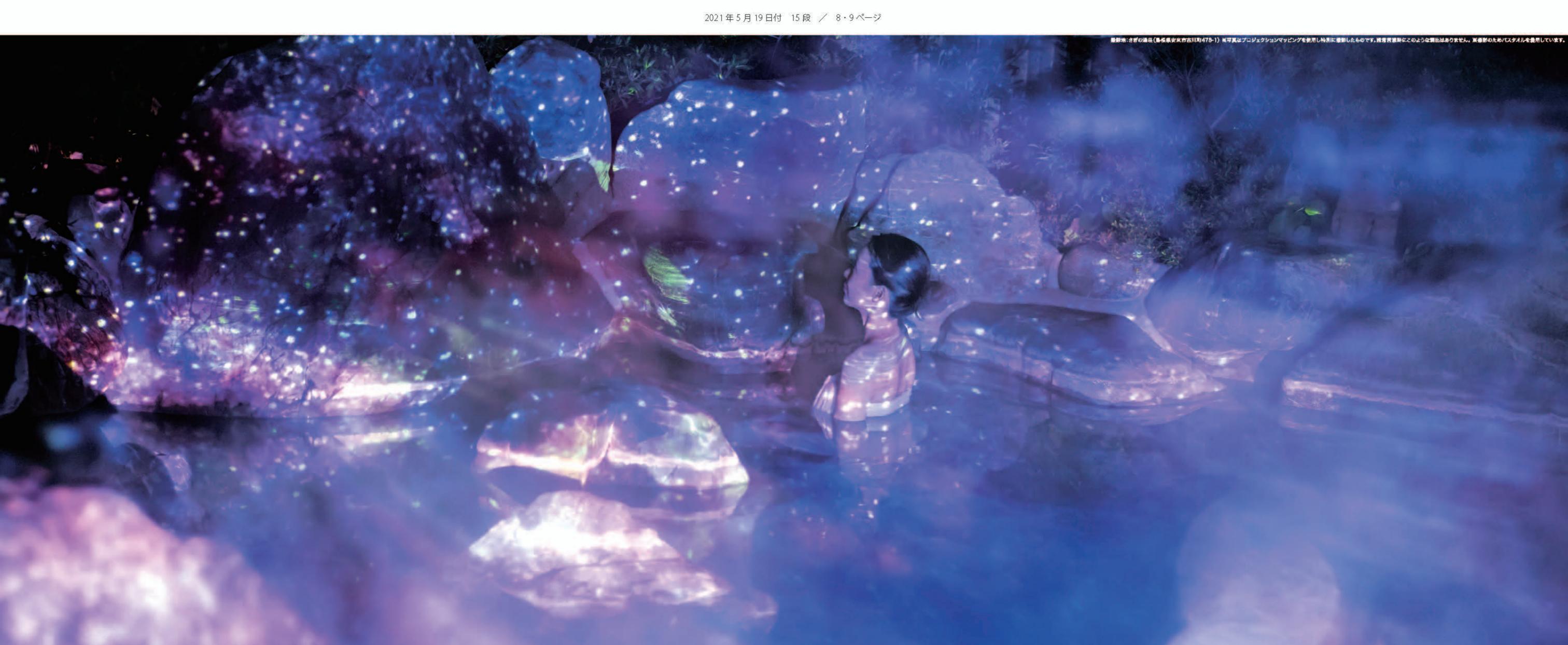
立ちあげた会社から松江に赴任したのは2019年。鳥取県米子市の観光局に勤務し、まちづくりで出会った山陰の魅力を学び、歴史観光の拠点「松江ガール」も立ち上げた。

「古事記、新編鳥羽伝説に記された鳥根は、「神々の故郷」とされる地域です。人より神々の数が多いのだから知れませんが、雄大な歴史の深い山陰は、現代社会のアナリスのようでもあります。鳥根にいた頃は空を見上げることはほとんどありませんでした。ビルや高層ビルばかりですから、山陰は空見や山、田舎の上は空にだけ、空に自然との一体感を感じられます。それだけでなく日本人にとっても「故郷」のような場所ではないでしょうか」

**鳥取県 松江市**  
まちづくり会社  
河野 美知さん

まちづくり

Profile/お名前:美知 1977年生まれ。鳥取県出身。大学卒業後、鳥取県米子市に勤務。まちづくり会社「まちづくり」を立ち上げる。2019年に鳥取県松江市に赴任。2021年1月の時点で、「八咫宮テーマパーク」や「マスコット」などの観光資源を生かしたまちづくりを推進している。



### 星取県とつとり

県内すべての市町村から天の川が見える鳥取県。鳥取市は、環海道の「全国星空観望スポット」で1位になったことがある唯一の県庁所在地でもある。流星群の時期以外でも、たくさん流れ星が見えやすく、ごのりアからも手の届きそうな星たちが夜空に輝く。鳥取県は、日本一の「星取県」なのだ。

そこがたえ市街地や住宅街でも大丈夫。星取県にいれば、天気がよければいつでも頭上には天の川と美しい星空が輝いている。そんな星空の下、庭で星空を肴に一杯というのも「異次元」な鳥取県に探訪する楽しみ。山や森へとキャンプに出かけるのだから最高だ。

降り道、と夜空を見上げるときらきらと光る天の川。その光は数百、数千、数万年というはてしない時間を超えて届いている。そんな壮大な時間の流れを感じながら、束の間、急ぐ足を止めてみたり。鳥取県がおおらかなのはこの美しい星空が関係しているのかも。

星取県の公式アプリ「星取MAP」では鳥取県民や星空マニアが教えて、とっておきの星空スポットも探せる。星をとり、星取県を動かしてみよう。

### かがやき浴びる

# 浴

うるおい浴びる

すべての市町村から天の川が見える「星取県とつとり」。古くから薬効豊かな温泉地が集まる「美肌県しまね」。満天の星空と美肌の湯、山陰で浴びませんか。

### 美肌県しまね

大手化粧品会社が実施する「ニラポシ美肌県グランプリ」で、鳥取県はグランプリ全国最多受賞の「美肌県」。周りの高級の人を思い浮かべれば、ほら、お肌がつるつるしてませんか？

鳥取県は、湿度が高くお肌の保湿にぴったりの地域。また、日照時間も短く、紫外線の影響を受けにくく、とから、美肌にとって、とても環境が整っているとも言われています。こうした別々らしい気象条件が、つるつるのお肌を育んでいるのだ。

そしてもうひとつ、声を大にして言いたいのが、鳥取県は日本有数の歴史と様々な景観で溢溢りが楽しめる温泉県だということ。例えば、日本最古の湯のひつじ玉湯温泉(庄)「松茸子」や「出雲国風土記」にも登場する由緒ある名湯だ。世界遺産「石見银山の一角にある「温泉湯(ゆのつ)温泉」や、美肌美人の湯として知られる「美又温泉」は、古くから湯治場として栄えてきた。

他にも日本三美人の湯「湯の川温泉」(日本三美人の湯に数えられる「聖乃上温泉」など、あげればきりがないほど、古く神話の時代から、この地の温泉が、肌を癒や続けているのだ。

鳥取県で鳥取に出会える場はこちです。

<p><b>鳥取県観光案内所</b></p> <p>〒100-0008 東京都千代田区有明1-2-2 日比谷シャンテ地下1階        観光案内所 TEL:0120-60-2357 aoudan@tokyo.tourism.jp        【基本営業日時】 毎日 11:00~19:00</p> <p>観光案内所 TEL:03-6205-4170 shimenaka@prof.shimane.jp        【基本営業日時】 毎日 11:00~18:00</p> <p>観光案内所 TEL:03-6457-9404        【基本営業日時】 毎日 11:00~20:00</p>	<p><b>鳥取県観光センター 鳥取県観光案内所</b></p> <p>〒100-0008 東京都千代田区有明2-10-1 東京交通会館5階        TEL:03-1853-6813 shimane@funasotokaido.net        【基本営業日時】 火~日 10:00~18:00</p> <p>【お問い合わせ先】 鳥取県観光センター TEL:03-6205-4170        〒100-0011 東京都千代田区千代田1-1-1 千代田駅前10階 108-09号室        TEL:03-6781-8800 event@tokyo.tourism.jp        【基本営業日時】 月~日 9:30~18:15</p>	<p><b>鳥取県公式アプリ「星取MAP」</b></p> <p>App Store / Google Play</p>
---	---	--





**近所の人が  
家まで運んでくれる**

学校が遠かったり距離が多かったり、でも車トクが運べたらラッキー、みんな知り合いだから家まで自転車を運んでくれることも多い。



**会話は最高のエンタメ  
世間話が3時間超え**

地域のみんなが繋がっているから、会話の話題には尽きがない。夏は刈りに行き、秋は収穫祭まで語りあし、語りあしは続く。



**大量のおすそわけを  
さらにおすそわけ**

農にすると、主に食べきれない量の新鮮なおすそわけが置いてあったり、それをさらに10人先の農家さんへおすそわけなんてことも。



**お茶番げが  
地元料理のフルコース**

お茶番げの定番、チヂミの定番、夏は現代の定番に、デザートのお菓子、お茶するつもりが飽きるほどは、お茶、お土産までもらったり。

**ずっと前から  
ソーシャルディスタンス。  
でも、ここは密です。**

山腹の道を駆け抜け、山の間を点在するのどかな集落。隣の家が2km先だったり、人より距離が多かったり、でも、繋がっているからこそ、人の心は深く繋がっている。それが山腹のローカルディスタンス。時代が変わっても、変わらない大切なものがここにある。



**田植えシーズンに  
人が増える**

田植えとあわせて若い人が帰ったり、子供たちがランドリアが帰ってきてくれたり、ゴールデンウィークの賑わいは毎年の楽しみ。



**草刈りはついでに  
お隣さんの敷地も**

隣の田んぼも知り合いの田んぼ、どうせやるなら、ついでに刈ってあげよう、背をつれれつづの感謝に繋がっているのがいいところ。

# ローカルディスタンス

Local Distance

鳥飼地：山王寺の棚田  
新青森大東町に位置する山王寺、標高300mの山腹に位置する棚田は「日本の棚田百選」にも認定され、地元の農家の人たちの手で大切に守られている。ふるさとが農業が直ぐく棚田は、国土や環境保全だけでなく、農家の生活の上でも大切な役割を果たしている。



# コロナに打ち勝て！

## 山陰経済循環



鳥取県  
遊休不動産  
×  
オンラインサロン!

鳥取市 文島

鳥取市

鳥取市



### 遊休不動産から生まれた オンライン × オフラインコミュニティ

リノベーションで遊休不動産を活用しているのが株式会社「まるにわ」。手がけているJR鳥取駅前「マーチングビル」は「新しい暮らし方と働き方」をテーマに、シェアハウスとワークスペースを併せ持つビルとして昨年オープンした。代表を務める齋藤浩文さんは「社会の変革期となった一年を通して新たに見えてきたのがオンラインを絡めたコミュニティづくりだ」と語る。

「以前から副業やコワーキングなど働き方は変わって考えていましたが、コロナ禍を経験し、オンラインの併用は不可欠だろうと。そんな時、『関係人口』をテーマにしたシンポジウムにゲストで出て、その関係者がこのテーマで何かできないかとオンラインのラボを始めてみたのがきっかけになりました」

5人で始めた「オンライン関係人口未来ラボ」は10週限定の予定だったが、回数を重ねるうちに参加者が増加。航空会社や鉄道会社、人材会社、インフラ企業……。首都圏からも多くの人に参加した。気づけば53週連続、毎週土曜日の朝7時から常時30人ほどが画面で顔を合わせるようになった。



▲株式会社まるにわは2019年に鳥取市で創業された。オンラインサロンをきっかけに、遊休不動産を活用する「関係人口」の活用を目的とした「関係人口未来ラボ」を立ち上げた。2020年10月に株式会社を設立し、鳥取市の遊休不動産を拠点に、関係人口の活用を目的とした「関係人口未来ラボ」を立ち上げた。2020年10月に株式会社を設立し、鳥取市の遊休不動産を拠点に、関係人口の活用を目的とした「関係人口未来ラボ」を立ち上げた。

「そこで可能性を感じ、オンラインサロンの立ち上げを事業の一つに考えました。オフラインなら地元の人たちの輪にとどまりますが、オンラインならそこに関係人口として首都圏で働く人に入ってもらえる。そうすれば、新たなコミュニティをつくっていけると思っています」

オンラインサロンでは、まず地域課題や企業課題ごとに、それについて考えたい人のチームアップをする。そこで議論しながらプロジェクトをつくって、オフラインの課題解決につなげていく、という流れだ。

「立場や職業など、その人の見る目によって解決する課題やその切り口は違います。産業系の人がいったり、まちづくり系の人がいったり、観光系の人がいったり……。はたまたそれが地方であり、都会であることも。そういう多様な人たちが集まってくることが大切です」

マーチングビルはオフラインでも、オンラインでも地方と都会を結ぶことを目指している。実際、サテライトオフィスとして使う都心部の企業があり、地方でのワーケーションの拠点にもなるという。また、齋藤さんは地方発のオンラインサロンは、首都圏のビジネスマンの興味を引くこともできると手応えを感じている。

「都会で働く人たちの中にも、副業で地方に関わりたいという人が増えています。地方との関わりも、移住が全てではなく、プロジェクトベースで全国各地につながりを持ちたい人も多いです」

キャリアやスキルを持った彼らが地方と関係を持つことで、地方企業にとっても学ぶ機会や人材育成の機会が増えるという利点もある。「地方経済の可能性は、オンラインが加速化する今だからこそ広がると思うんです」と、齋藤さんは明るく見据える。

### 仕事(ワーク) + 休暇(バケーション) これからの新しい働き方のヒントがここに

窓越しに広がる海と秀峰大山に癒されながら仕事、終わればレトロな町並みを歩き、ゆっくりと温泉に浸る。夕食は鳥取の美味と地酒が楽しめるバーで新たな戦略を語り合う。そんな夢のような働き方ができる「旅館×ワーケーション」が、松江市美保町の老舗旅館で動き始めている。

北前船の往来で栄えた美保商港に建つ創業116年の「美保館」。1908年に完成した数寄屋風本館は2004年、国登録有形文化財に指定され、当時の調度品とも相まってレトロな雰囲気がある。新型コロナウイルスの影響で観光需要が戻らないなか、専務の定秀福介さんは「今後も厳しい状況が続くと思いますが、利用客のニーズをつかむ新しい事業を展開していきたいです」と、リモートワークとともにコロナ禍で加速したワーケーションの需要を期待している。

ワーケーションの始まりは10年前。松江市発祥のプログラミング言語Rubyを使ったIT関係者や学生らのチーム合宿地に選ばれ、「静かで集中できる」「建物も周辺環境も観光地として魅力的」などの感想が寄せられたことで、手応えを感じた。ワー

ケーションに必要なWi-Fi環境やプレゼンテーション機器などの整備で、毎年都会地のIT企業が訪れるようになった。

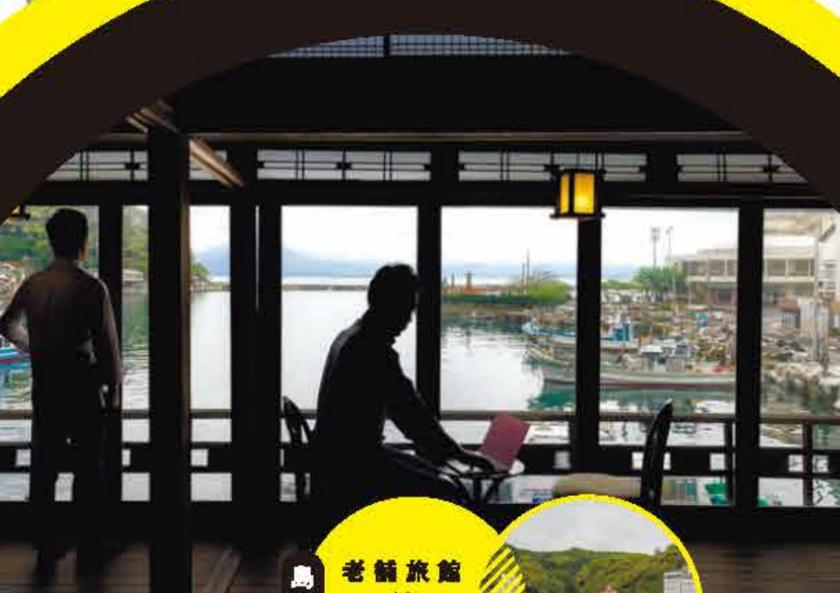
コロナ禍では他の利用客と接しない一棟貸しスタイルが好まれ、昨年はいくつかの企業も利用、また松江市のワーケーション誘致プランの会場にも選ばれた。今後、新しい滞在プランを用意し、人気が高まるキャンプ場も今夏オープン。よりワーケーション気分を味わってもらうためのサービスを充実し、付加価値の高いワーケーションを計画している。

以前は人口減少が進む地域の定住対策に躍起になっていたという定秀さんは、今では「人口が減る中でも幸せに暮らせる地域づくりを考えるようになりました」と変化を語る。地域の観光業者らと連携して周辺の美保神社や通称「青石量産地」で知られる古き良き町並みのにぎわい創出に力を注ぎ、19年には地域の課題だった空き家の古民家4軒を改修してゲストハウスをオープンさせた。

「個々では難しくても、つながって、力を合わせていけば新しい産業も生まれるはず。この先、ワーケーションをきっかけに移住やサテライトオフィスが実現して、新たな観光プランが生まれるかもしれないと思うとワクワクしてきます。試行錯誤を重ねてきた定秀さんの言葉に、アフターコロナ時代に向かうローカルの在り方のヒントがあるのかもしれない。



▲美保館の老舗本館。2004年に国登録有形文化財に指定された。調度品も当時のものが多い。美保館の老舗本館。2004年に国登録有形文化財に指定された。調度品も当時のものが多い。美保館の老舗本館。2004年に国登録有形文化財に指定された。調度品も当時のものが多い。



鳥取県  
老舗旅館  
×  
ワーケーション!

松江市美保町 美保館  
www.thehokan.jp/



# 世界を撮り辿り着いた、美しき辺境。

## 写真家・藤井保が見る、 山陰の美と可能性。

本紙の表紙と裏表紙を飾る、一対の写真。今年東京から、石見銀山のある大田市大森町へ拠点を移した写真家、藤井保さんによる撮りおろし作品だ。『広告写真の第一人者』、空気を撮る写真家、と呼ばれ、世界中の風景を撮り続けてきたトップクリエイターが、なぜ山間の集落を選んだのか。その思いとともに、写真家として見た山陰の魅力を語ってくれた。



生まれ育った土地を受け入れたら、世界がよく見えるようになった。

——藤井さんは、日清カップヌードルや無印良品、マクドナルドなど、日本の広告史に輝く仕事で知られる写真家です。ルーツを辿ると、ご出身が島根県なんですか。

大田市の三福山のふもとにある池田町で生まれ、大田高校の写真部に入りました。卒業後は横浜の学校で写真を学んだのですが、若い頃は都会への憧れもあったし、島根出身ということもコンプレックスに感じていましたね。フアッション写真に興味を持って開けていくと、ヴォークパリなどで見るヨーロッパの写真家がお手本になるのですが、向こうはパリやロンドンという都市、こっちは島根県でしよう。物理的にも心理的にもかなり距離がありますよね(笑)。

——確かに、島根とヨーロッパだとイメージは違いますが、でも、コンプレックスだった山陰や島根の見え方が変わった瞬間があったんですか？

20代で独立して、東京で写真の仕事をしていたのですが、今から35年ほど前に地元池田町を撮影したことがあります。親父が再婚して家が空っぽになってしまったのもあって、生まれ育った風景を撮っておこうと、それは、島根という自分の出身地を受け入れる体感でもありました。自分の出身を受け入れ、その上で自分なりの表現をしていこうと。海外の都会に憧れるのではなくてね。生まれ土地を受け入れたら世界がよく見えるようになったし、息災や虚栄心から解放されて、撮る写真も変わったと思います。

その風景の中にその人がいる、そこに意味がある。

——藤井さんの写真は「空気が写る」とも言われ、幻想的なタッチで知られています。そうした独自の作風には、山陰で育った影響もあるのでしょうか。

どうでしょう。特に意識したことはないけれど、夏や雨、曇りの風景は好きですし、厳しさの中で感じるものを大切にしている部分はあるかもしれません。例えばハワイは僕も何度も訪れていて、いい場所ですが、ずっとここには住めないという感じはするんです。明るく快適な環境に育っていると、自分が窮る感じがするというか。

——そうした環境からみると、山陰の風景や気候はどんな特徴がありますか？

山陰は季節による風景の違いが顕著に見えやすい場所だと感じます。冬は海と夏の海の違いも、はっきりとわかる。植田正治(家一)さんはヨーロッパでは今でも日本人が一番評価されている写真家だそうですが、そんな世界的な写真家も、生誕地島根県で撮り続けたというのも面白いですね。あの人は鳥取砂丘が自分のオープンスタジオ。そこには山陰の光も関係しているでしょう。

——藤井さんにとって山陰の光の魅力って、どんなところですか？

山陰の光はドラマチックですよ。出雲って、雲が出てくると、すごくいい。実際には雲が多いですが、そこに光が入ると、すごくいい。僕は海外に行くけど、いつも現地の雑誌を買います。それは、雑誌書にその土地の光が描かれているから。例えば、ささぎのハワイを例に出すと、ハワイの雑誌書って色が出すぎていて「リトラス」が強い。下手な絵だなぁと思うけれど、ハワイの夕日を実際に見ると、雑誌書と同じように鮮やかなんです。湿度が高いスコットランドなんか、雑誌書もいいんですけど、そういうものが、島土だし、風景は島土から生まれるものです。



昭和61年発行「ふる里の写真館」より

——藤井さんの独特の写真は、そうした島土との関係の中で生まれているんですね。

僕が思う写真というのは、肉眼で見る世界を撮るのではなく、自分がどう見たかを表現すること。その瞬間しか存在しない空気感というものがあって、同じ風景でも同じ写真は二度と撮れません。人を撮るにしても被写体と自分の間にある空気、そこが瞬間ごとにくっついていく。その風景と空気の中に、その人がいることに意味があるし、そのことはいつも意識しています。

大森町は美しい風景の中に人々の誇りが見える。

——山陰への移住についても、聞かせてください。藤井さんは広告写真の第一人者として活躍してきて、突然島根に移り住むと決めた。きっかけは何だったんですか？

1、2年ほど前から考え始めたのですが、コロナも遠因のひとつです。それから、僕が仕事をしてきた広告の世界や、世の中の風潮が変わってきたと感じたこともひとつ。このまま東京で働き続けることは、ある意味でこれまで自分が築いてきた仕事を維持することになるかもしれないと感じたんです。

——そして今年の2月、石見銀山のある大森町へと拠点を移されました。

僕は日本も海外も本当にいろいろな場所の写真を撮って来ました。よく「普遍的な場所はどこですか？」と聞かれるのですが、その答えは難しく、絶対的な理想郷ってどこにもないです。だけれども、その土地に暮らす人が誇りを持っていることは、とても大切。大森町は生まれ育った大田市というところもあるけれど、一番の魅力は人でしょう。人々が自分の暮らしにプライドを持ち、それが美しい風景の中に見える。それを見ることは、写真家の仕事でもあります。

—人の誇りが風景の中に見える。大森町のどこにそれを感じますか？

大森町は歴史ある古民家が並ぶ美しい街並みで知られています。外から見れば古民家でも、中に入れば心地よく暮らせる工夫がされている。博物館のように保存するだけではなく、人の暮らしの中で風景が受け継がれています。それは、群言堂(※2)の松嶋大吉さん、登美さん夫妻(※3)や、この町の人が作ってきた風景です。それから、この町の人たちはよく通りに花を飾ります。ささやかだけれど、訪れた人に楽しんでほしいという気持ちが見えますよね。僕も最近、門に小さな版面を飾りはじめました。

人の少ない場所だからこそ日本や社会の問題がよく見える。

—大森町での暮らしを始めて、約3ヶ月が経ちました。

この町にいて、日本や社会のことがよく見えますよ。僕は、大森町の話をすると「人口600人の銀山の町」と言っていたんだけど、今は約400人なんです。減っているんです。でも、この小さなコミュニティの中に、環境や経済、医療や教育、全ての問題がある。都市では社会の問題は隠蔽されて、直接的に問わらずに生きることもできます。でも、400人の規模では生活と社会の問題を切り分けることはできません。

—人の少ない場所こそ、誰かとして社会が見えやすいという。

「ゴミ捨て場も見えない、水がどこからどう来ているのかも見えないから、僕は、「プライベート」という写真集で、日本の難題を巡り取材をしました。鳥という物理的に限られた世界の風景の中で、日本の問題を浮き彫りにしたんです。つまり僕がこれまでやってきた仕事というのは、自然の風景と人が作ったものの間わりを批評することなんです。

—大森町で暮らしながら日本の問題を考えることは、写真家としての仕事と繋がっているんですね。

そうですね。ただ、その一方で、これまでは「写真家としての自分は傍観者でしかないのでは」という気持ちもありました。コロナや時代の変化の中で、「次は生活者として風景を作る側になりたい」という思いが強くなってきたんです。それも、大森町に移った理由のひとつです。

—風景を批評する立場から、風景を作る立場になる。それは具体的にどんなことでしょうか？

例えば、田舎の人って本当に歩かないですよ。僕は心身のメンテナンスのための毎日近所を歩きますが、今は新緑の季節でもて気持ちがいい。みんな車で通り過ぎる道を僕が歩いているだけで、ちょっとしなやかな道になるかもしれないと思います。ほんとうに小さなことですがね。

—藤井さん自身、これから大森町でどんなことをやりたいと考えていますか？

この家は古い武家屋敷を改装したもので、自宅兼事務所として「加藤家の「ロコ」と暮らして」を出しています。東京では「藤井保写真事務所」の名前でスタジオを構えていたけれど、もう「藤井保はいかない(笑)」。それよりも、地域の人が大切にしていた「加藤家」という名前を残したい。ゆくゆくは、写真家やデザイナー、いろいろなクリエイターが集う場所になりたいと考えています。僕は50年ぶりに島根に戻った人間で、ある意味では外人なんです。いい意味の違和感ももちろんありますが、生活すること、この町に少し違う風が吹けば、僕がいる意味もあるのかなと思います。

地元の高中生をモデルにした2枚の写真作品。

—今回、山陰を舞台にした写真と音楽、2枚の写真作品を制作していただきました。これから撮影ですが、どんなイメージを考えていますか？

どちらも大田市の海をバックに撮影しようと考えています。1枚は弓道部の高校生3人、日本の武道は所作がきれいで、静かな中に美しさがあります。もう1枚は吹奏楽部の中学生のマーチングで、音が響いてくるような重層的な楽しさをイメージしています。写真作品に込めるメッセージはありますが、僕はいつもあえて多くを語らないようにしています。それは見た人が想像力を働かせることで、見せざる言いたいことや説明しないことで、とても大事です。

—地元の高校の写真部の生徒たちも見学に来ると聞きました。

以前から写真部とは付き合いがあったので、生徒の写真を見て批評するようなどともやっています。みんなうまいですよ。みんながプロを目指す必要はないけれど、写真が好きな人になってくれたらいいと思います。写真を通して世の中が見えるということもありませんから。

—出演するモデルも地域の高中生です。若い世代へ伝えたいメッセージはありますか？

今は絶望と希望が同居する過渡期とした時代で、これから世に出る人は大変なことも多いと思います。でも、どんな時代でも希望や美しいものに目を向けることはできます。暗い中でも、どこかに光がある。それは僕の写真表現で常に意識していることでもありますが、僕も含めて素晴らしい人はいないです。でも、全く無能で才能のない人っていうのも、またいない。才能と無能は紙一重です。若い人たちは、自分が楽しみたいことを思い切りやってほしいですね。

—改めて、藤井さんが思う山陰の暮らしの魅力や可塑性について、教えてください。

僕は、これからは東京やニューヨークといった都会に何かの先端がある時代ではないと思います。コロナの問題もあるし、世界中をグローバルに行き来する時代にはもうそう簡単にはいかない。僕が今暮らしている大森町は小さな町ですが、群言堂や、中村ブレイス(※4)という素晴らしい企業があり、各地から若い人たちが集まって来ています。山陰に限らず、小さな町で大きな哲学を持って生きる人っているんです。これからは、自分の暮らす足もとを掘り起こすことでしょう。地域に根差しながら、東京もニューヨークも飛び越えて、日本や世界のこと、地域や宇宙まで見る、そうしたことが大切だと思います。

※1 植田正治  
1913年生まれ、2000年没。故郷の鳥取県を離れず活動した世界的な写真家。鳥取砂丘を背景とした芸術的な写真は「植田調」と呼ばれ、世界中で高い評価を集める。鳥取県の植田正治写真美術館ではその作品が展示できる。

※2 群言堂  
大森町の約170年の古民家本館とし、全国30店舗以上を展開するライフスタイルブランド「石見銀山 群言堂」。土地に根ざすものづくりのよさを全面に発信し、衣・食・住・美にかかわる様々なプロジェクトを手がける。

※3 松嶋大吉・登美夫妻  
「石見銀山 群言堂グループ」代表、「石見銀山 生活文化研究所」所長。1981年に夫婦で大森町にUターン。古民家を再生させ群言堂をスタート。服や雑貨の販売のほか古民家の修復を続け、人々が楽しめる場を構築している。

※4 中村ブレイス  
大森町に拠点を置く、1974年創業の国際展開メーカー。製造する後足や人工乳蓆など、製品は世界各国から注文を受ける。最初の社屋を皮切りに、大森の建造物を自費で改装・改修を続け、これまで60棟以上を再生させた。



Profile  
藤井 保(ふじい たもつ)  
1949年島根県大田市生まれ。大田高校卒。広告制作会社の写真部で勤務後、独立。JR東日本、日清カップヌードル、マクドナルド、無印良品などの広告写真で知られる。ADC最優秀賞、朝日広告賞、カンヌ国際広告賞フィルム部門最優秀賞受賞多数。主な写真集に『ぐんぐんどうろ』(平凡社)、『プライベート』『カムイミタラ』『A K A R U』(すべてリトルモア)、『藤井保の仕事と周辺』(穴屋社)など。2021年に東京から、石見銀山のある大森町へ拠点を移す。



①CL:株式会社良品計画,AD:原研哉  
②CL:株式会社エイアンドエス,CA:TUGBOAT,AD:TUGBOAT,CW:秋山暁,D:BRIDGE,Crd:TAKE2  
③CL:旭化成株式会社,AD:中嶋寛久  
④CL:石見銀山 群言堂,CD:佐藤 卓,AD:林 里穂子



つぎの  
NEW  
NORMAL  
NEW  
LOCAL  
SAN'IN

企画・発行  
山陽中央新報社 ビジネスプロデュース局  
〒650-8686 兵庫県神戸市東灘区  
TEL. 0692-3203380

表紙・裏表紙 写真＝藤井 保

Creative director 栗野 大地 [リテイククラブ]  
Editor in chief / Copy writer 山根 マサヤ [1.3n / イッテンサンマガジン]  
Director 田村 環 [リテイククラブ] / 瀧野 亨 [あさひマガジン] (09-10-12-13) / 大森 州 [シズイロデザイン] (09-13)  
Art director ぶかばか亭 [リテイククラブ] (09-2-3-6-7-10) / 瀧野 恒史 [リテイククラブ] (09-8-11-14-15) / 品川 良樹 [ノード] (09-9) / 石川 誠規 [デュアリ・アートデザインプロダクション] (09-10)  
Photographer 藤井 保 (09-10) / 渡邊 実守 (09-10) / 七咲 友梨 (02-3-4-5-8-9-14-15) / 松浦 敦尚 [SHIBUDO] (09-11-12) / KWAN (09-11) / bokura editors (09-12-13)  
Designer ぶかばか亭 [リテイククラブ] (09-2-3-6-7-10) / 瀧野 恒史 [リテイククラブ] (09-8-11-14-15) / 品川 良樹 [ノード] (09-9) / 石川 誠規 [デュアリ・アートデザインプロダクション] (09-10) / 藤田 真吾 [あさひマガジン] (09-12) / 山本 達也 [シズイロデザイン] (09-13) / 藤野 佑太 [リテイククラブ] (09-14-15)  
Illustrator 大畑 晋 [デザインワークス] (09-7) / 藤田 雅典 [デュアリ・アートデザインプロダクション] (09-10)

Stylist 瀧山 楓花 [0-14] (09-16)  
Hair make 島田 竜太 [Hair Salon Mellow] (09-10)  
Producer 杉野 忠 [西尾山 杉野忠グループ] (09-11-16)  
Editor / Writer bokura editors (09-12-13)  
衣裳制作 日吉 乙江 [西尾山 杉野忠グループ] (09-10) / 橋山 由紀子 [西尾山 杉野忠グループ] (09-10)  
衣装協力 石見順山 琴音堂 (09-10)  
Cast 鳥取県立大田高等学校 琴音堂 (09-11) / 大田市立大田西中学校 吹奏楽部 (09-10)  
Model 原 由貴 [Stone cast agency] (09-9)  
Special thanks ザンパ工業 (09-10) / 斎藤 誠徳 (09-10) / 安田 亮 (09-10) / 藤田 泉貴 (09-10) / さぎの郷荘 (09-9) / 山王寺本願寺自治会 (09-11)